石巻市

文化財だより

第17号

もくじ

誌上文化財めぐり……1

指定文化財紹介……7

稲井水沼地区の板碑分布調査報告……11

旧町名表示石柱設置事業……24

文化財標柱設置事業……25

石巻市教育委員会

【誌上文化財めぐり】

歩いてみませんか…ふるさとの文化財

よく晴れた日曜の朝は、身も心もさわやかになるもの。遠くへ行くのもいいけれど、たまには家族そろって石巻の歴史を見て歩くのもいいんじゃないですか？

今回は、ちょっとドライブがてらに稲井地区の文化財を歩いてみましょう。ピクニック気分でお弁当をもっていってみるのもベターですね。

まずは開北橋を目指して車を走らせてみましょう。悠々と流れる北上川を渡ると、住宅街が途切れて青い水田と緑の山々が見えてきます。稲井地区は文化財の宝庫。あちこちに古代のロマンが眠っています。その手始めは「南境貝塚」。車は「ウマッコ山」を左手にながめながら飯野川方面へと進んで行きます。小高い馬の背状の上り坂にさしかかると、その頂上が河北町との境界線。そしてその一帯が南境貝塚です。

①南境貝塚

縄文時代の貝塚で、縄文時代の各時期を判別する目安となる土器型式「南境式土器」の出土した貝塚です。土器の他にも石器、骨角器、縄文人の人骨が発見され、全国的に注目を集めました。

しかし、残念なことに昭和四十六年の開田工事の為大部分消滅してしまいました。今は田の中に若干の土器片を見ることができます。

▶南境貝塚

車をもう一度石巻へ向けましょう。二百メートル程走ると、金沢部落へと入っていく三叉路が左に見えてきます。そこに見える杉林が「南境館跡」。登り口に標柱が建っています。高い山ではありません。車を降りて登ってみましょう。

②南境館跡

「館（タテ）」とは、中世の豪族の屋敷、あるいは戦闘時の防御施設です。敵が攻めにくいように「空堀（からぼり）」を堀ったり、「土塁（どるい）」という土手状の土盛りを築いていることが多く、山頂部は平らに整地されています。

この南境館跡は、葛西氏の家臣、大瓜玄蕃が造ったと言い伝えられています。

少し疲れましたか？まだ大丈夫。さあ車は更に稲井の奥へ進んで行きます。霊園への登り坂を登ってゆくと、龍洞院の大きな山門が見えてきます。

◀南境館跡（中央杉林中に段築が築かれている）

③坊澤山龍洞院

開山は葛西氏第十五代晴胤の叔父である文誉和尚で、その関係から、ここには葛西清重が京都から持ち帰ったという延命地蔵尊像や、葛西家から贈られたという市指定文化財の「葛西椀」が保存されています。

車は大瓜部落にさしかかりました。道の左側に古い石碑が沢山建っているのが見えますね。何でしょう。

④寺崎板碑群

板碑（いたび）とは、中世の石でできた卒塔婆（そとうば）で、中世の状況を知る為の貴重な資料です。

◀寺崎板碑群

右に田園風景、左に緑の山、のどかな景色に囲まれて、思わず深呼吸をひとつ。そうこうするうちに、目の前に田んぼに突きでた小高い山が迫ってきました。これが「鷲の巣館跡」です。

⑤鷲の巣館跡

石巻市内最大の館跡ですが、ここは館というより、「城」と呼ぶにふさわしい本格的な縄張り（城の地割り、構造のこと）を持っています。

山頂部に本丸、そして東に向かって二の丸、三の丸が築かれ、土塁や空堀が形良く配置されており、東側斜面には、通路状の大きな土塁が遠くからでもはっきりと見えます。

館主は、平小三郎と地元では伝えられています。

◀鷲の巣館跡

鷲の巣館跡を迂回する道を高木方面へと走っていくと、やがて人家のない所に出ます。鷲の巣館跡と同じ丘陵にある「高木古館」が左手の山の上にあります。

⑥高木古館

高木四郎右衛門という人の居館と伝えられています。山頂には本丸と、それを取り巻く段郭（斜面を削って階段状にした所）、土塁、空堀が殆んど完全に残っています。東と西に急斜面があり、この地方でも有数の要害堅固な館と言えます。

高木西のバス停から、ちょっと部落内に入ってみましょう。沢沿いに山に向って登ってゆくと、小さな観音堂があります。ここに沢山の板碑があります。

⑦観音堂板碑群

石巻地方には稲井石でできた板碑が多くありますが、ここ観音堂には約百基の板碑があり、石巻市内でも最大規模の板碑群です。中には、市内で初めて見つかった図像板碑（地蔵の図）や、三本足のカラスとウサギの図という、奇妙な板碑もあります。

さて、地蔵板碑や三本足のカラスの碑は見つかりましたか？次は高木東部へと足を伸ばしましょう。高木部落の一番東側にさしかかると、左手の高台に大きなイチョウの木が二本、堂々とそびえたっています。これが市の指定天然記念物、**吉祥寺の大イチョウ**（⑧）で、市内最大級の大木です。

車は稲井の最奥部水沼部落に入ります。ここは中世の遺跡の宝庫で、水沼館跡、安楽寺跡と板碑群、水沼窯跡などが集中しています。

▶安楽寺跡板碑群（板碑後方の水田が安楽寺跡）

⑨水沼館跡

中世この地を支配した水沼上野の居館と伝えられています。水沼館跡は、峠を越えて針岡まで抜ける道の基点にあり、このことから、当時は交通、軍事の要となる重要な館であったと考えられます。

⑩安楽寺跡と板碑群

安楽寺は、水沼部落を東西に分けるように伸びる細長い丘の基部にあった中世の寺院跡で、板碑や一字一石経（石に一字づつ経文を書いたもの）が発見されていて、近くの水沼館跡との関連が注目されています。

⑪水沼窯跡

安楽寺の北東に見える赤土の崖面に、陶器の窯が七基程発見され、ここから渥美半島（愛知県）の特産とされていた中世の「袈裟襷文（けさだすきもん）」の土器が発見され、全国の注目を集めました。

車は静かな山合を抜け、左手に稲井平野を望みながら真野地区へと進んで行きます。ここには、有名な十一面観音像のある長谷寺があり、萱原伝説や義経伝説など、いにしえのロマンが香る所です。

⑫舎那山長谷寺と観音堂

藤原秀衡によって勧請された寺と伝えられ、この地方随一の古刹です。特に観音堂には十一面観音像が安置されており、源義経出陣の時必勝祈願をしたと言い伝えられ、義経が兜をかけた「かぶとかけ松」という名木もありましたが、今は枯失してしまいました。

▶長谷寺観音堂（この中に十一面観音像が安置されている。）

⑬菅原伝説地

山門の前の池に沢山の葦が生えていますが、これが「片葉の葦」といわれ、古くから、『都を慕ってその方向にばかり葉をつける』と、歌枕に使われました。

露わけむ秋の朝気は遠からで
都は幾日まののかやはら
藤原　定家

長谷寺のある日向地区の対岸に見えるのは小屋館跡（⑭）で、葛西清重が石巻に入る前に仮に住んだ館と伝えられています。それらを後にして、車は一路沼津へと進みます。

沼津部落の真中に横たわる細長い山、鶴が首を伸ばしたような形に見えます。この山全体が「鶴子坂館跡」（⑮）で、源義家が安倍貞任と戦う為に造られたと伝えられています。

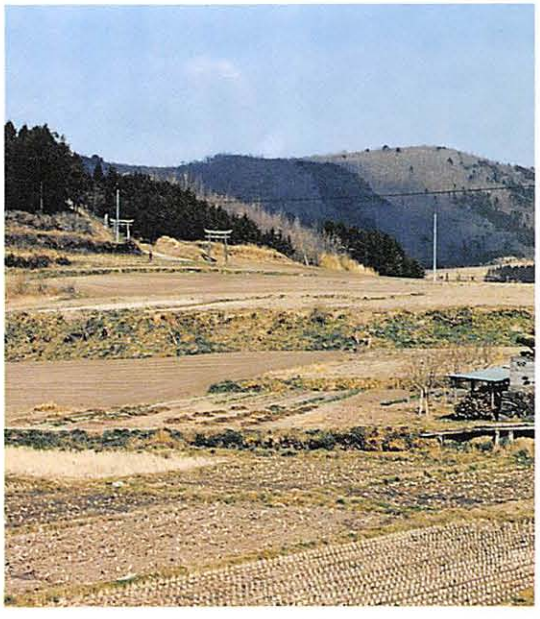
そして、その東端にある畑一帯が、国指定史跡「沼津貝塚」です。

⑯沼津貝塚

古くから知られていた大貝塚で、鹿角製漁具の出土で有名です。多くの学者や研究者がここを訪れ、幾つもの論文に発表されました。考古学研究にとってなくてはならない存在であったのです。

現在も、畑には沢山の貝殻がちらばり、それと一緒に縄文土器のかけらや運の良い時には石鏃なども見つかることがあります。

▼鶴子坂館跡（中央最頂部に本丸が築かれている。）



▲沼津貝塚（畑地一帯に遺物が散布している。）

そろそろ夕闇も迫ってきました。土器のかけらは見つかりましたか。そろそろ家路を急ぎましょうか……。

いかがでしたか、今回の「誌上文化財めぐり」。今回ご案内した文化財はほんの一部で、この他にも色々な文化財があります。この次はもっと身近な、もっと充実した内容でお送りしたいと思います。

（案内役　石巻市教育委員会　社会教育課文化係）

① 南境貝塚
② 南境館跡
③ 坊澤山龍洞院
④ 寺崎板碑群
⑤ 鷲の巣館跡
⑥ 高木古館跡
⑦ 高木観音堂板碑群
⑧ 吉祥寺の大イチョウ
⑨ 水沼館跡
⑩ 安楽寺跡と板碑群
⑪ 水沼窯跡
⑫ 長谷寺観音堂
⑬ 真野萱原伝説地
⑭ 小屋館跡
⑮ 鶴子坂館跡
⑯ 沼津貝塚

ご存知ですか？ わがまちの指定文化財!!

石巻市内には、全国的にも有名な「国指定史跡・沼津貝塚」など、学術的に貴重な文化財が数多くあり、その中でも重要なものが「指定文化財」として指定されています。

石巻市内の指定文化財には、国指定の文化財が二件、県指定の文化財が二件、市指定の文化財が十六件と、あわせて二十件あります。

これらの指定文化財は、いったいどんなものでしょうか。次に、その簡単な内容をご紹介しましょう。

《国指定の文化財》

▼**重要文化財「岩版」**（所有者＝毛利伸氏・住吉町一　時代＝縄文時代　所在地＝住吉町一）

岩版とは、岩石に彫刻をほどこして作られた板状、あるいは扁ぺいな楕円形のものです。何のために、どのようにして使われたのかはっきりしませんが、護符、つまり「お守り」として使われていたのではないかと考えられています。（昭和36年2月指定）

▼**史跡「沼津貝塚」**（所有者＝浅野繁雄氏外十一名　時代＝縄文～弥生時代　所在地＝沼津字出外）

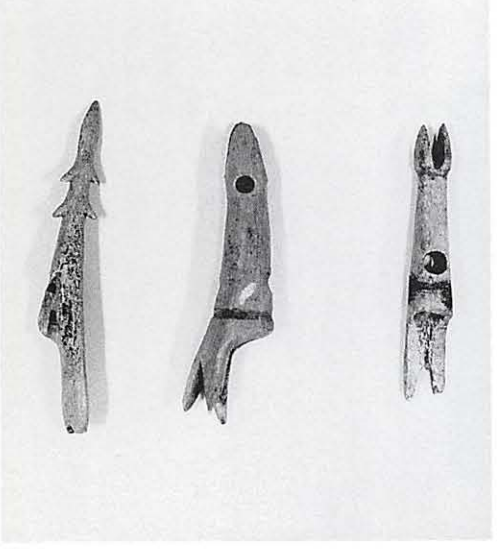
稲井中学校の前の県道を真直ぐ金山方面へ進んで行くと、間もなく鶴が首を伸ばして横たわった形の山が右手に見えてきます。この山の基部に広がるタバコ畑が、有名な「沼津貝塚」です。

沼津貝塚は、大正から昭和にかけて、遠藤源七、毛利総七郎両氏によって発掘されました。出土した遺物には沢山の土器や石器がありますが、特に骨角製（鹿の角や、動物の骨で作られたもの）の釣針や銛などの漁具類が、他に例のないほど多量に出土したことと、その優秀さで有名になり、昭和47年10月に国史跡として指定されました。

今でも、多くの学生や研究者が沼津貝塚を訪れています。

▲重要文化財「岩版」

▼沼津貝塚出土骨角器（毛利伸氏所有）



▼沼津貝塚全景

《県指定の文化財》

▼牡鹿法印神楽　（代表者＝桜谷守雄氏　湊字牧山）

神楽（かぐら）は、神座遊（かみくらあそび）の略で、神座の音楽の意味であるとも言われています。

牡鹿法印神楽は、沼津地区の有志によって伝承されてきたため、一船には沼津の法印神楽とも呼ばれ、その舞楽様式や舞台装置など、独特の郷土色を伝えています。（昭和46年3月指定）

▼仁斗田貝塚　（所有者＝阿部久氏他八名　時代＝縄文時代　所在地＝田代浜仁斗田字内山）

船が田代島の仁斗田港に入ると、右手の崖の上に畑が広がっています。ここが仁斗田貝塚です。

宮城県内にある貝塚は、アサリ、ハマグリ、シジミといった砂浜に生息する貝が多いのですが、この仁斗田貝塚の貝はカキ・レイシ等の岩場に生息する貝が多く、県内でも珍しい貝塚で、このような貝塚を「岩礁性貝塚」と呼びます。

ここからは、縄文土器や石器、骨角器（動物の骨や角で作った道具）が出土しています。（昭和50年4月指定）

▲牡鹿法印神楽

《市指定の文化財》

▼多福院板碑群　（所有者＝三輪宗顕氏　吉野町一　時代＝中世　所在地＝吉野町一）

板碑とは、主に鎌倉時代から室町時代にかけて造られた石製の卒塔婆です。古文書が残っていない中世の状況を知るための、ひとつの手掛りとして貴重なものです。

この板碑の中には、中世石巻地方を支配した葛西氏のうち、第七代葛西良清（法名蓮阿）第八代葛西満良（法名蓮昇）の板碑も見られます。（昭和50年6月指定）

▼平塚ツナ家文書　（所有者＝石巻市　時代＝近世　所在地＝石巻市教育委員会）

江戸時代天保の頃を中心に活躍した豪商平塚八太夫の関係文書です。幕末における海運史の解明、近世・近代にかけての商業資本の形勢を理解するうえで貴重なものです。

この資料は、昭和61年7月に、所有者の平塚ツナさんのご好意により、石巻市に寄贈されました。（昭和五十一年六月昭和五十六年十二月指定）

▼鳥屋神社奉納絵馬「奥州石ノ巻図」

（所有者＝桜谷隆氏　時代＝近世　所在地＝羽黒町一）

文化二年（一八〇五）、石巻村中町の総若衆によって奉納されたものです。黒地に金・銀・朱を使い蒔絵（まきえ）風に描かれた近世石巻の肖像で、その当時の石巻の繁栄ぶりが偲ばれます。

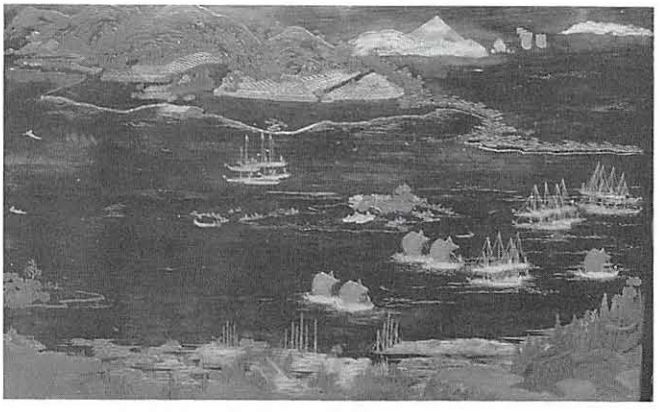
作者は会津の蒔絵師長谷三吉衛門義一で、その作風・技術は素晴しいものです。（昭和五十三年八月指定）

▼旧石巻ハリストス正教会　（所有者＝石巻市　時代＝近代　所在地＝中瀬公園内）

明治十三年に建築されたもので、ハリストス正教の木造教会としては日本最古、また教会建築としても、大浦天守堂に次ぐ古さです。

内部は、一階が集会所、二階が聖所と

▼鳥屋神社奉納絵馬「奥州石ノ巻図」



▲旧石巻ハリストス正教会教会堂

なっており、二階天井にはドーム構法のゆるやかなアーチが見られます。

建物は上から見ると十字型をしています。その十字型の頭の部分は、日本の八角堂の手法がとられ、全国的にもその擬洋風のユニークな構造で有名です。

初めは千石町にありましたが、昭和五十三年六月の宮城県沖地震で崩壊の危機にさらされましたが、若手建設業者による「建青会」の協力で移築・復原されたものです。（昭和五十五年十二月指定）

▼彫刻「潮音」　（所有者＝石巻市　所在地＝石巻文化センター）

石巻市出身の天才彫刻家高橋英吉氏の代表作ともいうべき「海を主題とする三部作」のうち、二番目に制作されたもので、昭和十四年の文展特選に選ばれた作品です。

英吉氏は、戦時色濃い中でも芸術活動を続け、天才彫刻家としてその名声を高めました。しかし、昭和十年にガダルカナル島で戦死。三十一才の若さでした。（昭和五十五年十二月指定）

▼吉祥寺の大イチョウ　（所有者＝高木吉祥寺・一方井文章氏）

秋、高木経由水沼行きのバスが「高木東」のバス停に止まると、黄色に染まった二本の大木が目に入ってきます。この二本の大木が指定文化財の大イチョウです。ともに雌株で、北側の木は高さ約二十二㍍、根回り約九㍍、南側はそれぞれ約二十八㍍、約七㍍あり、市内を代表する大木で、地元では「高木」の名の由来になったものと伝えられています。

▼龍泉院の大イチョウ　（所有者＝龍泉院・泉孝夫氏　所在地＝水沼字天似）

秋も終りに近づいたある日、静かな龍泉院の境内を訪れると、山門から本堂までびっしりと埋め尽すイチョウの葉のジュウタンが私達を迎えてくれます。

このイチョウは高さ的二十二㍍、根回り約七・二㍍で、吉祥寺の大イチョウと並んで石巻市内有数の大木です。（昭和五十五年十二月指定）

▼葛西椀　（所有者＝坊澤敏和氏　時期＝中世　所在地＝大瓜字棚橋）

この葛西椀は、一般的に言われる秀衡椀の一種です。三重入子の椀には、それぞれ十二弁の菊、洲浜、源氏雲などの模様がほどこされています。

龍洞院を開いた文誉和尚は、葛西氏第十五代晴胤の叔父であったことから、葛西氏から贈られたものと伝えられ、その制作年代も室町時代末期から桃山時代と推定されています。（昭和五十六年五月指定）

▼彫刻「黒潮関日」　（所有者＝石巻魚糧工業・松並一　所在地＝石巻文化センター）

先に紹介した「潮音」と同じ高橋英吉氏の作品で、「海を主題とする三部作」のうち、一番最初に制作された作品です。昭和十三年文展に入選し、「天才彫刻家出現！」と、当時の美術界を騒がせました。

のどかな海の男の休日が、私達を安らかな心にしてくれます。（昭和五十六年五月指定）

▼渡波獅子風流　（代表者＝千田豊）

正月になると、渡波の町中にお囃が響きわたります。これが渡波獅子風流です。

▼高橋英吉作「潮音」

鎌倉時代に根岸部落を中心に発祥したと伝えられています。初めは氏神の祭典に奉じられていたものが、やがて松の内に各戸を訪れてその家の安全、繁栄を祈願する行事になりました。

今、子ども会、青年団、保存会の皆さんによって保存されています。（昭和五十六年十二月指定）

▼彫刻「漁夫像」　（所有者＝石巻市所在地＝石巻文化センター）

高橋英吉氏の「海を主題とする三部作」のうち、一番最後の作品です。

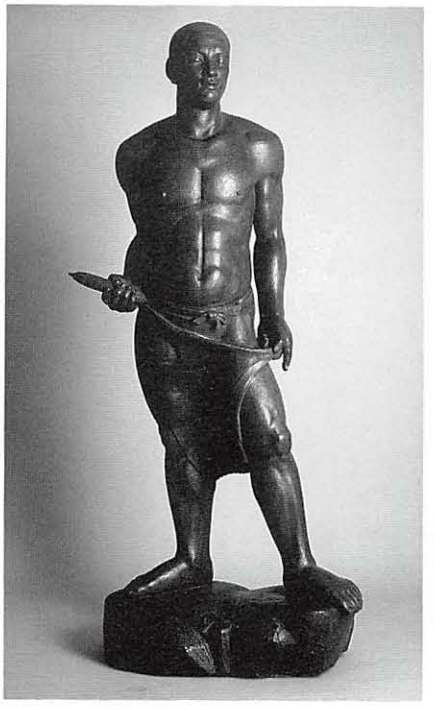
漁具を手にした若い漁師の利々しい姿が、見る者にさわやかな感動を与えてくれます。

なお、昨年度指定された牧山の宝筐印塔他四件の石巻市指定文化財につきましては、文化財だより第十六号をご覧ください。

紹介しました指定文化財は、すべて先人が遺してくれた大切な私達の財産です。いま生きる私達の手で大切にして、後世に伝えていきましょう。

▲葛　西　椀

▼高橋英吉作「漁夫像」



▼高橋英吉作「黒潮関日」

※お　願　い

紹介いたしました文化財は、所有者の皆さんのご好意と努力によって大切に保管されています。見学する方は、必らず所有者に連絡をとり、迷惑をかけないようにして下さい。また、所有者の都合で見学できない場合もあります。

昭和六十一年度　文化財調査報告

稲井水沼地区の板碑分布調査

※調査期間
昭和六十一年七月十九日
～二十四日

※調　査　員
佐藤雄一（宮城県石巻高等学校）

※補助調査員
今村　礼身　阿部　信子
佐藤真由美　及川　順子
（石巻市立女子商業高等学校）

1、調査区域の概要

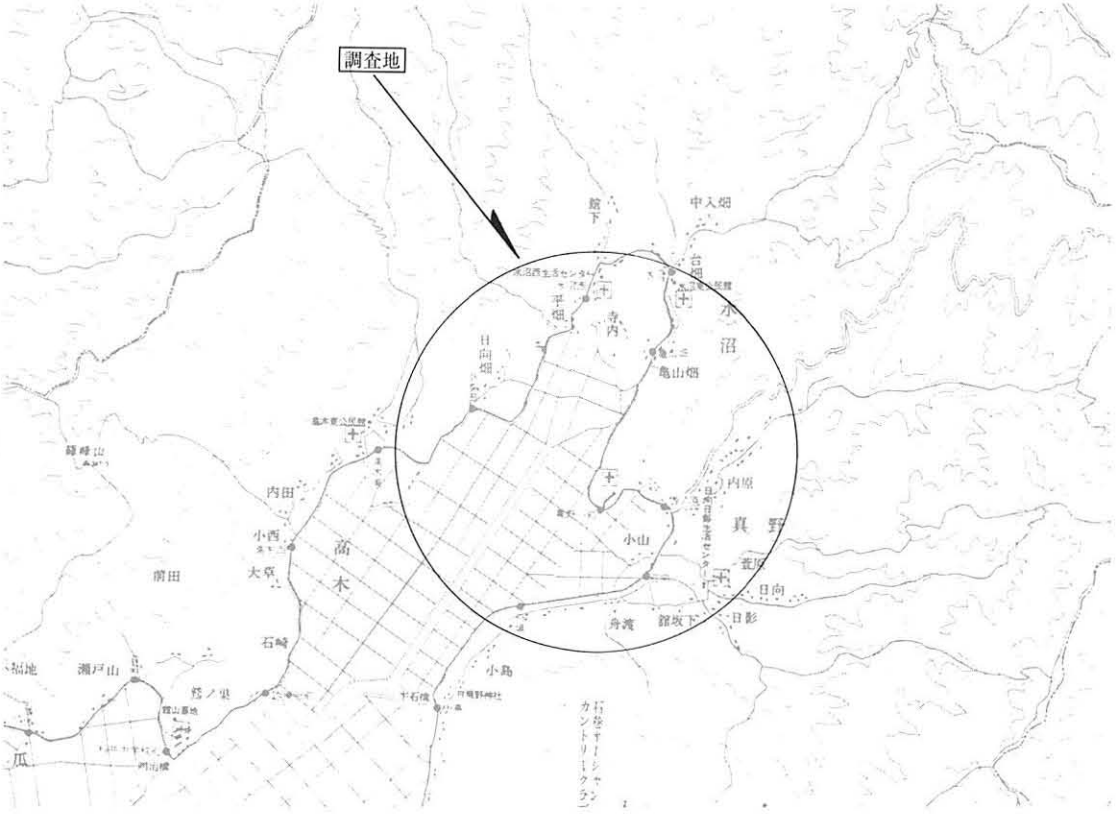
本年度の調査地域である水沼地区は石巻市の北部に位置し、稲井地区を南流する真野川の上流で、標高四六七㍍の上品山を北端として、桃生郡河北町と隣接し、東側は牡鹿郡女川町と接する。集落の南側は水田地帯になっている。板碑は東光山安楽寺跡と伝える寺内を中心に散在している。また北部斜面には平安末期と推定される窯跡が確認され中世期文化とのかかわりをうかがわせる。

水沼地区の中世の状況を示す史料は見当らないが、江戸期の「安永風土記書上」にはおおよそ次のような記述がある。

牡鹿郡水沼村　小名　東沢　寺中　亀山
　　西沢　寺内　小駄田
高七拾三貫百三十六文
　内廿貫七百三十四文　新田
田代　六十三貫五百八十五文
　内廿貫九十六文　新田
畑代　九貫五百五十三文
　内六百三十文　新田
　八貫六百九文　茶畑
（中略）
一、人頭　百三人　内寺壱ヶ寺
一、人数　七百七拾人内男三百九十三人
　女三百七十七人
一、馬数　百三疋

おおよそ以上のようであるが、寺壱ヶ寺とは亀山地区にある亀向山竜泉院のことで現存している。板碑とのかかわりでは、佛閣の部に次のような記述がある。

（上略）
一、阿弥陀堂
　但御□高□□縁起無御座此所者東光山安楽寺と申寺場ニ而弘安前後石塔板多ゟ得ハ右寺場ゟ西を寺内東を寺中と申在家御座ゟ
　とあり、また「名石」の部に
一長石
　但弁慶殿礫石と申伝ゟ
一腰掛石
　但弁慶殿□□腰掛石と申伝ゟ
一石塔　長九尺
　横三尺
　厚さ六寸
　但安楽寺阿弥陀堂後御座ゟ弁慶殿石塔と申伝文字見分無御座ゟ



とある。更に中世期とのかかわりのある記述として、

一古館　高弐拾四間
　　横三十六間
　　長六十六間
　　但水沼上野殿居城之由申伝ゆ

安永風土記書上の以上のような記述から考察しても往古の水沼地区は中世期の歴史と重要なかかわりがあったことは明らかであるように思える。

2、板碑造立の概要

a、板碑造立地区

水沼地区は江戸期の旧水沼村であり、石巻市の北端に位置するといってよい。また水沼地区には式内社と伝えられる伊去波夜和気命神社があり、深山権現として地区住民の信仰を集めている。さらに神社参道の右手には文珠院不動堂が現存し、嘉元三年（一三〇五）の碑があり、水沼地区の生活圏の広さを教えてくれる。

水沼地区は西から小多田、平畑、館下、中入畑、寺内、亀山の集落が上品山の麓に扇状にひろがっている。集落の南側は全面が水田である。

これら六つの集落のうち板碑造立が確認されていないのは中入畑だけであり、その他の五つの集落には、数のばらつきはあるが、それぞれ特色のある板碑が造立されている。

これら板碑の造立されている五つの地区で、数量的にも内容的にも、水沼の板碑造立の中心と推定されるのは、東光山安楽寺跡と思われる館下地区の板碑群である。

現在ここの板碑群は安楽寺跡の東端と推定される道路脇に移動されているが、そこから少し北寄りの水田の中に一部ではあるが原位置を保つ状況で保存されている。この東光山安楽寺とかかわりあいをもつと思われる板碑群は紀年銘の明確なものを中心にして考察すれば弘安六年（一二八三）を上限とし、永享三年（一四三一）を下限とした広がりを見せている。最大の大きさは正和元年（一三一二）のア（胎蔵界大日）を種子にした大型のものである。石巻地域における鎌倉期の板碑は大型で、時代が下るにしたがって小型化していくという傾向は水沼地区でも同じように観察された。東光山安楽寺跡の後背地には水沼上野の居館跡と伝えられる比較的整った状態で保存されている水沼館跡があることも板碑とのかかわりで注意されてよいであろう。

中世館跡とのかかわりで板碑を考察するとすれば小多田地区にある水沼古館跡と伝えられる西斜面で確認された貞和四年（一三四八南北朝）の大型板碑も注意されなければならないだろう。これは南北朝期に入っても2メートルを超す大型板碑が造立されていたことと、この板碑はほぼ原位置を保っていると推定されることである。

b、板碑造立数について

水沼地区の板碑については、風土記書上には前述したように『（前略）東光山安楽寺と申寺場ニ而弘安前後石塔板多ゆ得ハ』云々とあり、また「名石」の部に『弁慶殿礫石』とか『弁慶殿□□腰掛石』あるいは『石塔長二尺　横三尺、厚六寸』といった記述があるだけで、古碑の全容はまったく記述されていない。宮城県の板碑をまとめた宮城県史⒀金石篇には一基も集録されておらず、稲井町史には水沼地区として嘉志三年（嘉元であろう）文珠院、応長元年七月日、外十数基ありと記されているだけである。

今回の調査で確認された板碑総数は断碑も含めて三十五基である。最も多い地区は東光山安楽寺を中心とした館下地区で62％の二十二基が確認された。次いで多かったのは小多田地区の七基であったが、これは観音堂、水沼古館跡の大型板碑を含むものであり、小多田地区の考察には重要な手掛かりをあたえてくれることになるのではなかろうか。

表(1)　水沼地区の板碑造立状況

時代＼地区	小多田	平畑	寺内	館下	亀山	合計
鎌倉	1	1		5		7
南北朝	2			6		8
室町	2		2	2	1	7
不明	2			9	2	13
合計	7	1	2	22	3	35

※地区名については国土地理発行1/25～の地形図記載のものをもとにしている。

c、時代区分と板碑造立の状況

水沼地区の板碑総数三十五基のうち紀年銘の確認できるものは表⑴に見られるように、二十二基であり、鎌倉期、南北朝期、室町期ともにほぼ同数で、これからは造立数による時代的な特徴を引き出すことはできなかった。しかし、中入畑および亀山の板碑でNo29、No30、No35のように板碑としての内容を整えながら無年号のものが造立されていたり、東光山安楽寺跡の板碑に、No19、No22、No24のように下部が欠損したりして年号が不明になっているものに、種子の彫り方から鎌倉期のものと推定することができるものがあることなどを考えると、より深い考察を加えれば、一層はっきりすることは可能であると思われる。このような不分明なところが多いと思われる水沼地区の板碑群ではあるが、若干の考察をしてみたいと思う。

①時代区分と板碑の形態

先に全体考察の中でも記していることであるが、板碑の形態は初発期の板碑ほど大型で、時代が下がるにしたがって小型化していくという形式上の一般的な推移は水沼地区でも同様のように観察された。しかし、小多田地区の水沼古館の西斜面に造立されて、原位置を保っていると思われる貞和二二年碑、および観音堂前面にある応安元年碑は、ともに2メートル以上もある大型の板碑であり、もし、紀年銘が不明であったとしたならば、鎌倉期のものと推定されても不思議ではないと思われるほどのものである。

②時代区分による種子の変化と供養内容

水沼地区における種子の表われ方を時代区分と組み合わせてみると表⑵のようになる。

総数三十五基のうち、種子を確認できるものが三十基であるが、時代を確定できないものが十一基もあり、残りの十九基も、鎌倉期七期、南北朝五基、室町期七基とほぼ均等に分散しており、各時代を通しての特徴を把握することはできなかった。強いて特徴的なことをあげるとすれば、室町期には阿弥陀、勢至菩薩、胎蔵界大日、金剛界大日、釈迦、虚空蔵と多様になっていることであろうか。

また、忌日と主尊種子との関係をみてみると、室町期の三基は五七日忌の地蔵、三年忌の阿弥陀、三十三年忌の虚空蔵はそれぞれ対応しているが、なかには、三十三年忌が釈迦であったり、十七年忌の主尊種子が金剛界大日(バーンク)であったりして統一性を欠いているようにも思える。さらには鎌倉期のものには、三十三年忌が金剛界大日(バン)であったり、三年忌が釈迦(バク)であったりしている。大瓜、高木地区においては、忌日と主尊種子との関係は、ほぼ統一された現われ方をしていたのであるが、水沼地区においては、忌日と主尊種子の合致するものがあるかと思えば、同時代においても忌日と主尊種子が一致しないものがあるなど、十三思想から十三仏信仰にいたる変化の過程をさぐるための手掛りになるかもしれない。今後の課題であろう。

表(2)　水沼地区の種子と時代区分

時代＼種子	キリーク(阿弥陀)	サ(観音)	サク(勢至)	アーンク(胎蔵界大日)	バーニク(金剛界大日)	カ(地蔵)	バク(釈迦)	ベ(薬師)	カーン(不動)	カンマーン	タラーク(虚空蔵)	五輪塔	バン(金剛界大日)	ア・カンマーン	ア・アーン(阿弥陀)	不明		
鎌倉	2						1						1	1	1 1			7
南北朝	1				1	1	2									1		5
室町	1		2	1	1		1				1							7
不明		1	1	1					1		1	2	2			2		11
計	4	1	3	2	2	1	3		1		2	2	3	1	1 1	3		30

d、特記すべき板碑

①嘉元三年碑（No 1）

▲No 1 嘉元三年碑

平畑地区にある文珠院不動堂前にある。文珠院不動堂は現存し、鈴木暁氏のもとで管理されている。この文珠院不動堂は「風土記書上」には、深山大権現宮の別当として位置づけられており、ここでいうところの深山大権現宮は文珠院不動堂の左脇を登ったところに現存する。「風土記書上」による深山大権現宮は牡鹿十座の一つである伊去波夜和気命神社と伝えられており、深山宮の額が掲げられている。「風土記書上」による深山大権現宮の記載は次のようである。

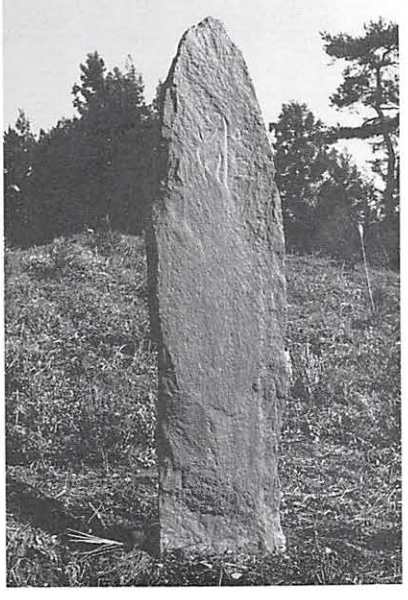
一深山大権宮　別当本山流山伏宮在家屋敷　文珠院

但、御神躰御長二寸金佛、縁記無御座、祭礼日八月朔日、古棟札弐枚、文字見分在之、慶長十九年□□棟札、相見得□、但、開基□月相回不申、別当代々先祖委相知不申、古□所持御座ゆ、相知甲分、栄深法印ゑ當時迄十一代御座ゆ

とあり、栄深法印は文明十四壬寅（一四八二）正月十九日方寝としている。

以上の記述からこの嘉元の碑はほぼ現位置を保っているとみてよいのではなかろうか。表面はほぼ平らに加工されているとみられ、厚さも15cmと比較的厚く鎌倉期の板碑の原型を伝えているように思える。また種子もアン（普賢菩薩）、ウン（馬頭観音）とあまりみられない組合せであり、その彫り方は通常の薬研彫りであることには変りはないが、種子の書き方は他にみられない特徴がある。

②貞和二二年碑（No 3）



◀No 3 貞和二十二年碑

水沼古館跡登り口（中沢重信氏所有地）右側の斜面に、原位置を保っていると推定されるところに造立されている。南北朝期の碑であるが、2メートル30センチと大型板碑に属するものであり、南北朝初期にいたっても、鎌倉期における板碑作成の傾向が衰えることなく継承されていたことを物語るものではないだろうか。また、水沼古館跡に造立されていることを考えれば、中世武士団の板碑造立の風習のあり方を教えてくれているのかもしれない。種子はキリーク（阿弥陀）、偈は、「浄土教古徳之偈」である。

③應安元年碑（No4）

種子バーンク（金剛界大日）は高さ2メートル12センチの中に悠然とおさまっており、前記貞和二二年碑の二十年後に造立されたものであるが、この時期になっても鎌倉期の大型板碑の系譜が継続していることを確認できる。最大幅は七〇センチ、厚さ一〇センチであり、全体として薄い板状に加工されていると考えて差し支えないようである。

銘文には右塔婆意趣とあり、この板碑が證公律師三十五日の供養のために卒塔婆として造立されたことを表わしている。造立者が證公律師の弟子であることも注目に値する。

▲No4應安元年碑

▲No9弘安六年碑

この碑は元禄十二年に供養碑として改造しており、現在、小多田の観音堂正面に板碑の面を南面さして立っている。したがって残念なことではあるが、原位置は不明である。

④弘安六年碑（No9）

安楽寺跡の一群の一基であり、水沼地区における最古の碑である。この碑は「風土記書上」佛閣の部に

一阿弥陀堂

但御□高作人相知不申、縁起無御座、此所者東光山安楽寺と申寺場ニ而弘安前後石塔数多御座ゟ、右寺場ゟ西を寺内、東を寺中と申在家御座ゟ

とある弘安の碑であろう。

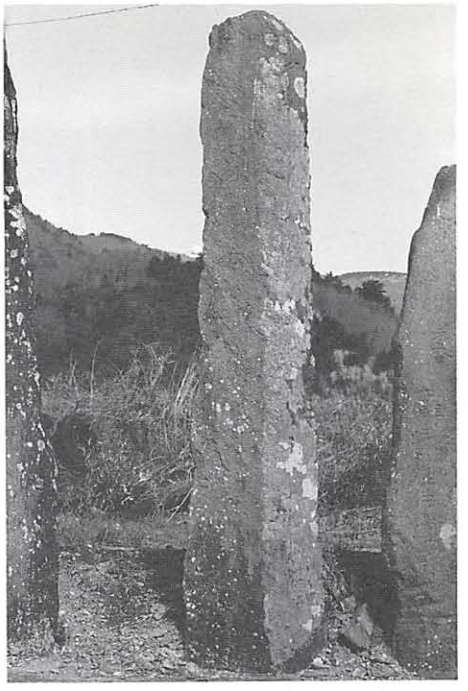
⑤正和元年碑（No11）

水沼地区最大の板碑である。種子はア（胎蔵界大日）。彫り方は比較的残いが、書き方に工夫がこらされておりそれが薬研彫の手法とうまく合致し、一種独特の雰囲気をかもし出している。

この碑は「風土記書上」の名石の部に

一石塔　長九尺
　　横三尺

▲No11正和元年碑



▲No14貞和二年碑

厚六寸
但安楽寺阿弥陀堂後御座ゟ、弁慶殿石塔ト申傅、文字見分無御座ゟ

と記されている碑であろう。

同じく「風土記書上」に

一長石
但弁慶殿磔石と申傅ゟ
一腰懸石
但弁慶殿□□腰懸石と申傅ゟ

と別記されている二つのものは別のものであろう。

⑥貞和二年碑（No14）

種子はサ（観音）、ウーン（金剛菩薩）と思われるが、上部に三弁宝珠をそなえている数少ない例である。また、「結衆敬白」の文字が示すように水沼地区唯一の結衆板碑である。

この碑については、高橋克弥氏が、「石巻市水沼所在の古碑群について」の論稿で、この碑を時衆碑であるとされ、遊行回国の時衆が時の権力側に組みこまれ、軍略の一端を負わせられていたため、南朝側に与した豪族の所在地には時衆碑があり、そこが北朝側との接点になっていたとする説が立証されるとされている。しかし、この板碑が時衆碑であるということは一考を要することであると思う。

⑦無紀年の板碑三基（No29 No30 No35）

板碑は卒塔婆であり、忌日供養の主尊を最上部に刻し、それにふさわしい「偈」を種子の下に配し、中央に供養した年月日（忌日）を記し、その両側に卒塔婆造立のための銘文を記してあるのが、もっとも整った板碑の形式である。特にいわゆる忌日を欠くということは、単に種子のみを刻して卒塔婆とすることをのぞいてはほとんどみられない現象である。そして種子のみで卒塔婆として認めてもよいものが各地に多数散在する。石巻地区においても種子のみで板碑として扱われてよいものが、室町期以降のものと推定される小型のものが各地区に散在している。しかし、ここに紹介するNo29 No30 No35の三基は、種子、偈、銘文が刻されているが、紀年銘を刻するのに十分な余裕がありながらも、紀年銘を欠くという他に類例のない板碑である。高さは100cm前後、幅は40cm前後、厚さは10cmと三基ともにほぼ同じくらいのものである。なぜ、板碑の内容を完全に備え紀年銘を刻するだけの十分の余白を残しながら紀年銘だけを除いているのであろうか。これまでの石巻市内の調査でも見当らないことであるし、他の地域の調査報告でもみられないことなので、諸家に解明の糸口を教示していただきたいと思う。

以下、これら三基について若干の考察を考えてみることにする

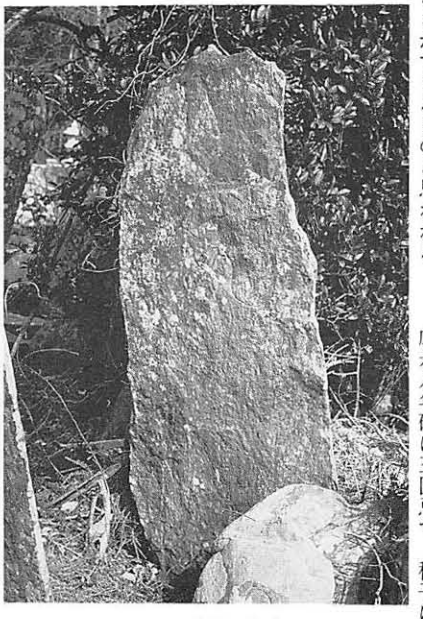
No29 No35は共に栄厳大禅門の供養碑である。栄厳大禅門なる人物は他に史料で確かめることはできず、いまのところまったく不明である。No29は遠方忌すなわち十三回忌の供養であり、本地佛アーンク（[梵字]・胎蔵界大日）は忌日と本地佛は一致している。しかし、No35は拓本および実際の碑から判断すると十一ヶ年忌の供養碑と判断されるが、十一ヶ年の忌日供養とはこれも類例がないのではなかろうか。種子はバーンク（[梵字]・金剛界大日）である。もし十一ヶ年が十三ヶ年であるとするならば、十三年忌の本地佛としては時期によってはバーンクが用いられてもいるので、この碑の忌日と本地佛は一致することになる。とすれば、No29 No35の二基は栄厳大禅門の十三年忌の供養のために、金剛界大日と胎蔵界大日を用いてセットで卒婆塔を造立していることになり、この碑についてはこのように観察しても、他に類例のない卒婆塔造立になりそうである。

◀無紀年板碑（No30・No35）

No30の碑は浄空上座大祥忌の供養碑である。大祥忌の忌日は三回忌であるので種子はキリーク（𑖭・阿弥陀）でなければならず、種子サク（𑖮・勢至菩薩）は合致しないことになる。

⑧明徳三年・応永八年碑・No31 No32

ともに亀向山龍泉院の開山塔近くの墓地にあるもので龍泉院とのかかわりを考えることができるものと思われる。



▲No32応永八年碑

▲No31明徳三年碑

明徳三年碑は原位置を保っているものと推定されるが、応永八年碑はつい最近、墓地の改葬によって移動されてしまった。その際、教育委員会には連絡されることがなかったので、地下遺構についての手掛りは、まったく失われてしまった。明徳三年碑は三十五日の供養で、種子はカ（𑖯・地蔵菩薩）、応永八年碑は三回忌で、種子はキリーク（𑖭・阿弥陀）であり、両者とも忌日と本地佛は合致している。

e、偈について

水沼地区において確認された板碑の偈は次のようなものである。おおよそ表われた年代順に記してあるとともに、忌日・種子が判明しているものは一緒に記してある。

①十方三世仏　出典＝不明
一切諸菩薩
八方諸聖教
皆是阿弥陀
（貞治二二年碑・No3・種子＝阿弥陀）

・この偈は、古来、本朝浄土門古徳の釈文と伝える。

②十方佛上中　出典＝法華経方便品第二
唯有一来法
無二亦無三
除佛方便説
（至徳五年碑・No16・種子＝釈迦）
（永享三年碑・No18・種子＝金剛界大日）

③□□正智　出典＝不明
大虚空蔵
即是正覚
法性□本
（年代＝不明・No19・種子＝虚空蔵）

④今此三界　出典＝法華経譬喩品第三
皆是我有
其中衆生
悉是吾子
（年代＝不明・No30 No35・種子＝勢至菩薩・金剛界大日）

⑤真言不思議　出典＝般若心経秘鍵
観誦無明除
一字含千理
即身證法如
（年代＝不明・No29・種子＝胎蔵界大日）

以上、水沼地区の偈は五例にすぎないが、④の法華経譬喩品第三を出典とする偈は、No30 No35の年代不明の二基に刻されているものであり、種子はそれぞれ勢至菩薩と金剛界大日である。これらの組合せに何らかの意味があるのであろうか。

3．板碑作成上の問題点

板碑作成上の問題点について、特記すべきこともないのであるが、次の点については、ほぼ明確に推論できるのではないだろうか。すなわち、碑の前面は何らの調整がなされていることである。このことは、それぞれの実測図をごらんになっていただければ納得してもらえるのではないかと思っている。このことは前年度の高木地区の調査においても確認されていることである。

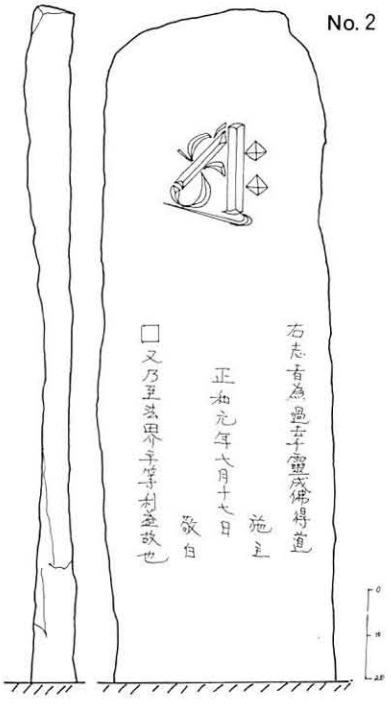
4．保存について

水沼地区の板碑は各地に散在しているが、それぞれの地区における保存状況は比較的良好である。特に水沼地区の板碑造立の中心であったと推定される東光山安楽寺跡の板碑は教育委員会の配慮によって一ヵ所に整理され、説明板も設置されている。あえて水沼地区における板碑保存の問題点を指適するならば、中の畑の観音堂前に放置されている無年号の

No29 No30の二基であろう。この二基は本文中でも考察しているように、種子、偈、銘文を備えており、板碑としての内容が完全に整っているにもかかわらず、年代だけが刻されていないという他に類例のないものである。この二基は簡単に移動できるような状態で放置されているので、早急に原位置に固定化するなどの処置を講じ今後の研究者のためにも、紛失することのないように配慮もする必要があると思われる。

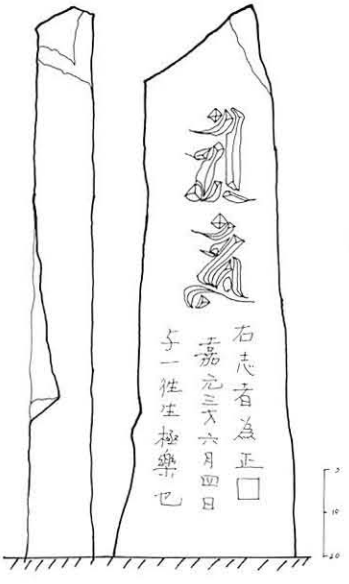
・小多田地区（以下材質は全て粘板岩）

No. 2



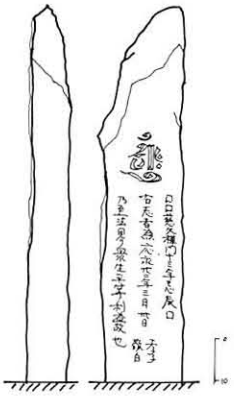
高さ：150cm　幅：52cm
厚さ：10cm

No. 1



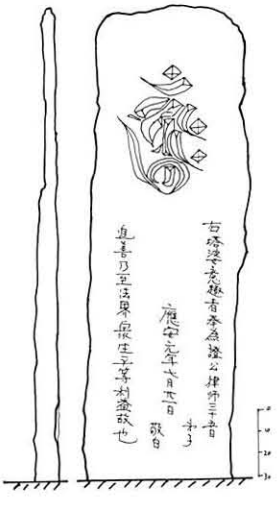
高さ：120cm　幅：40cm
厚さ：15cm

No. 5



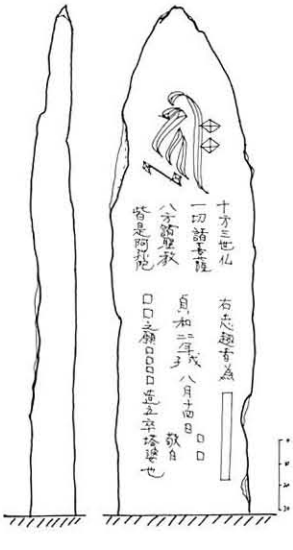
高さ：85cm　幅：17cm
厚さ：10cm

No. 4



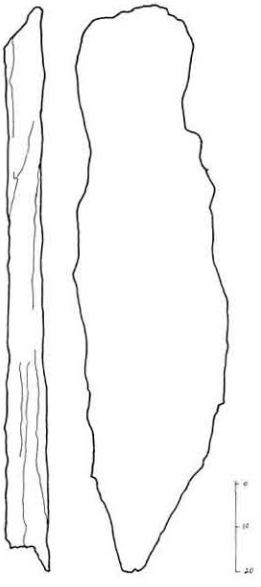
高さ：212cm　幅：70cm
厚さ：10cm

No. 3



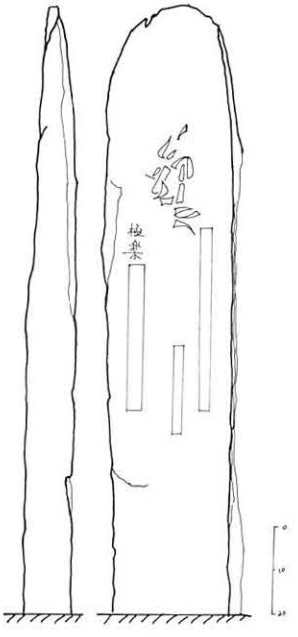
高さ：230cm　幅：63cm
厚さ：19cm

No. 8



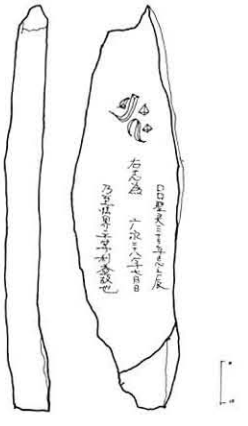
高さ：127cm　幅：33cm
厚さ：9cm

No. 7



高さ：135cm　幅：29cm
厚さ：12cm

No. 6



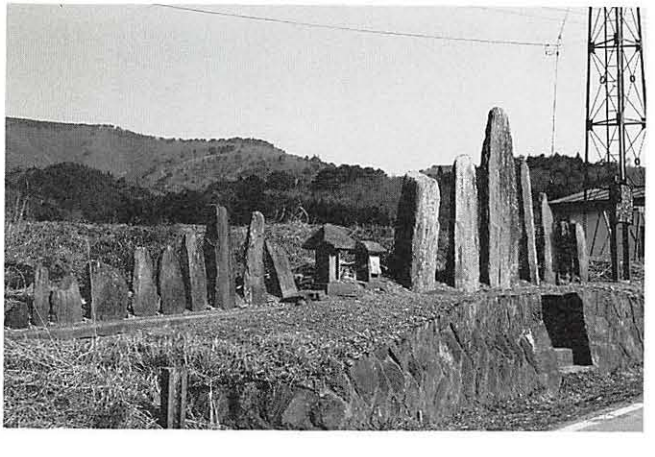
高さ：90cm　幅：23cm
厚さ：8cm

・水沼館下（安楽寺跡）

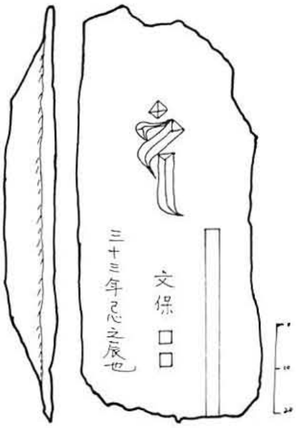
No. 9

高さ：156cm　幅：53cm
厚さ：15cm

▼安楽寺跡の板碑

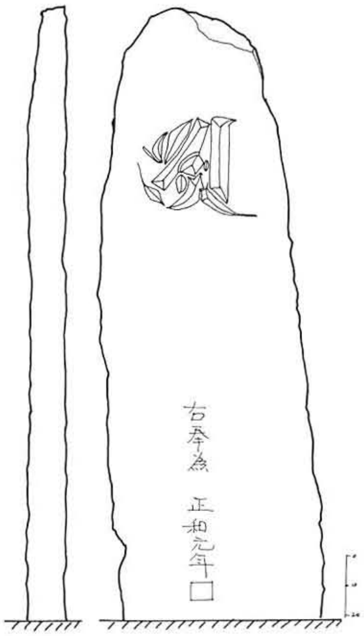


No.12



高さ：93㎝　幅：39㎝
厚さ：11㎝

No.11

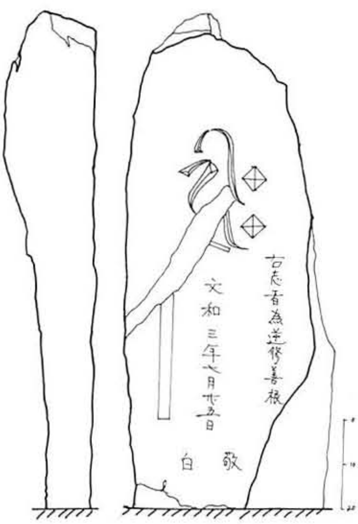


高さ：275㎝　幅：95㎝
厚さ：17㎝

No.10

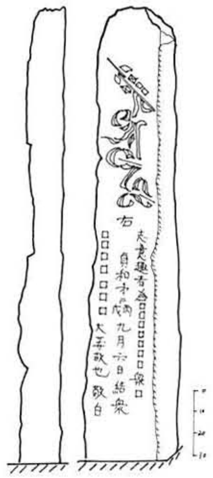
高さ：56㎝　幅：43㎝
厚さ：6㎝

No.15



高さ：112㎝　幅：47㎝
厚さ：20㎝

No.14

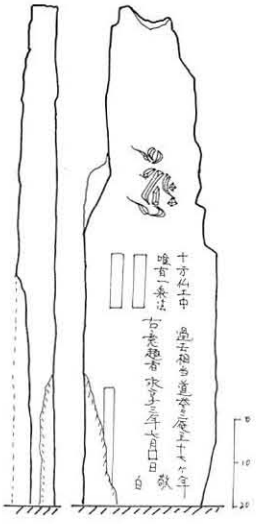


高さ：203㎝　幅：42㎝
厚さ：18㎝

No.13

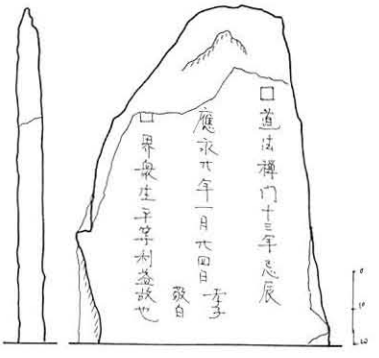
高さ：80㎝　幅：26㎝
厚さ：8㎝

No.18



高さ：112cm　幅：30cm
厚さ：17cm

No.17

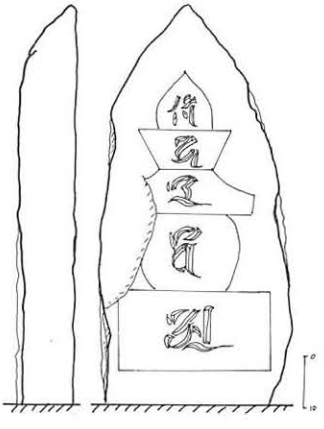


高さ：45cm　幅：36cm
厚さ：3.5cm

No.16

高さ：110cm　幅：42cm
厚さ：21cm

No.21

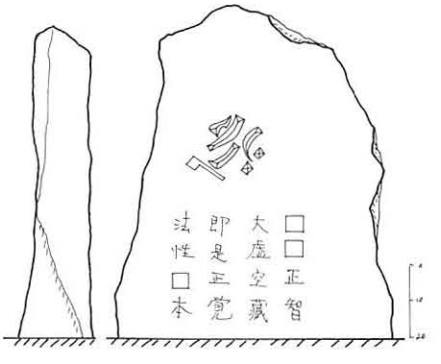


高さ：72cm　幅：33cm
厚さ：10cm

No.20

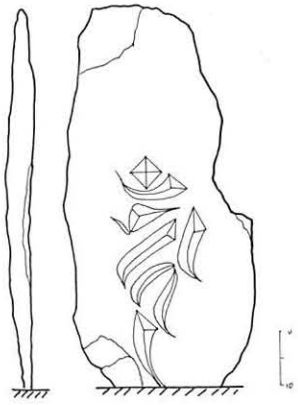
高さ：57cm　幅：18cm
厚さ：4cm

No.19



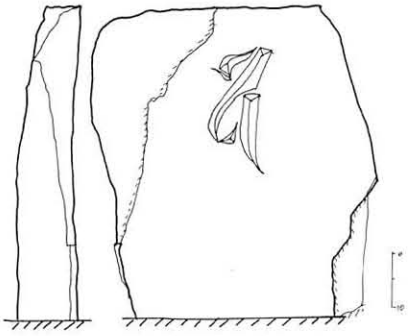
高さ：45cm　幅：37cm
厚さ：9cm

No.22



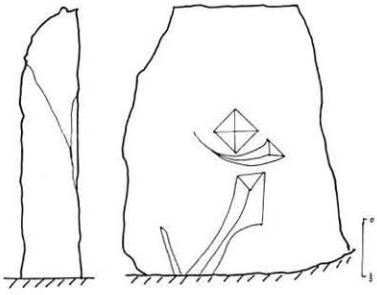
高さ：68cm　幅：32cm
厚さ：6cm

No.23



高さ：55cm　幅：46cm
厚さ：6cm

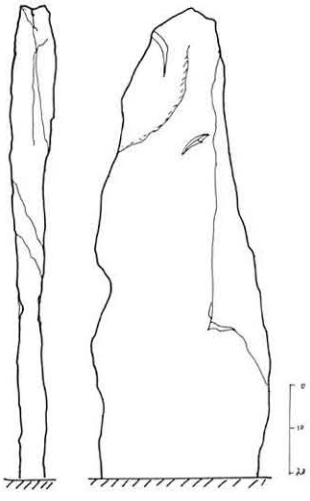
No.24



高さ：24cm　幅：18cm
厚さ：5cm

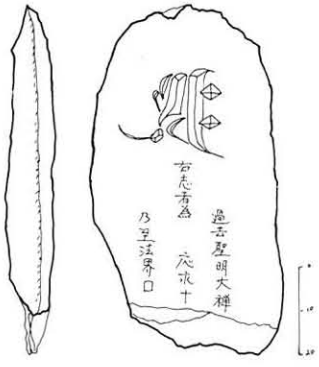
・館下（田の中にあり）

No.25



高さ：106cm　幅：37cm
厚さ：9cm

No.26

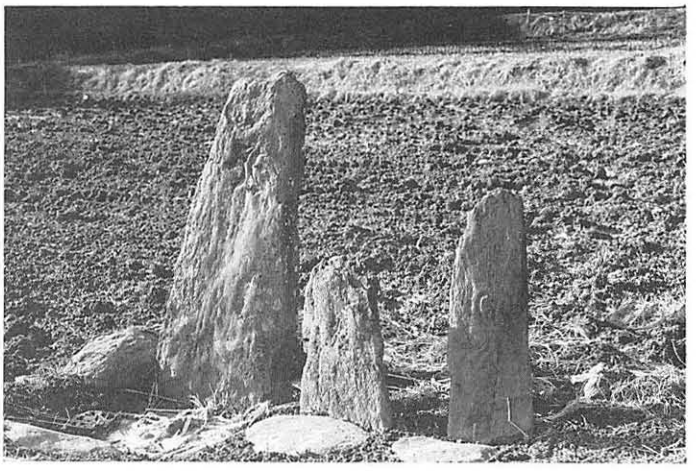


高さ：80cm　幅：42cm
厚さ：10cm

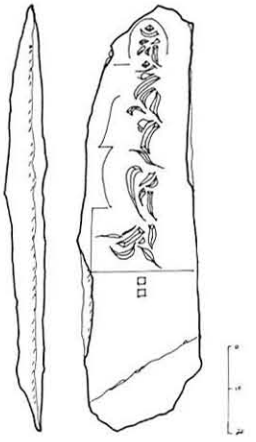
No.27

高さ：118cm　幅：53cm
厚さ：7cm

▼館下の田の中にある板碑



No.28



高さ：94cm　幅：28cm
厚さ：14cm

・寺内（観音堂前）

No.29

高さ：90cm　幅：38cm
厚さ：8cm

No.30

高さ：80cm　幅：37cm
厚さ：10cm

・寺内（竜泉院墓地）

No.31

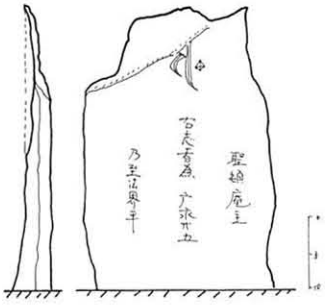
高さ：150cm　幅：63cm
厚さ：9.6cm

・亀山

No.32

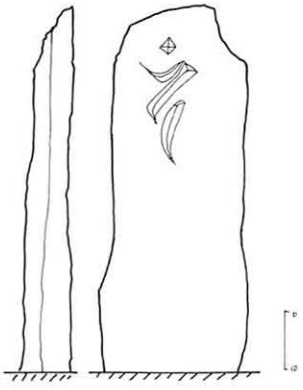
高さ：215cm　幅：75cm
厚さ：16cm

No.33



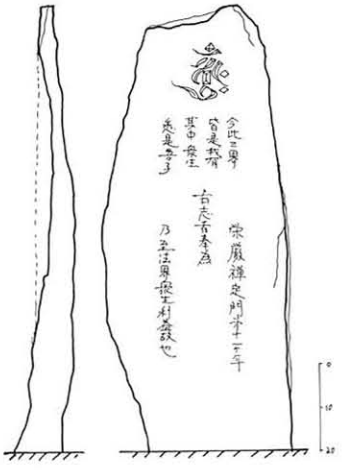
高さ：38cm　幅：25cm
厚さ：8cm

No.34



高さ：65cm　幅：25cm
厚さ：9cm

No.35



高さ：100cm　幅：40cm
厚さ：11cm

▼水沼窯跡（板碑との関連が注目される）

旧町名表示石柱設置事業

〝町名も文化財〟
由緒ある町名を後世に…

現在、日本各地で住居表示の変更が進められており、昔からの町名は次第にその姿を消しています。これは、「合理的な住居表示を・・・」という目的で昭和三十七年に制定された「住居表示に関する法律」によって、昭和三十八年から住居表示の変更が進められてきたためです。石巻市においても、昭和四十年から新しい住居表示を実施し、「横町」「袋谷地」など、多くの町名が変更されてきました。

これまでの町名は、「道」や「通り」に面した一連の家々を一つの「町」としてとらえてきました。ところが新しい住居表示では、従来あまり交流の少なかった、背中あわせの「区画（ブロック）」を単位とした「街区方式」といわれる方法です。

由緒ある「町名」は、それ自体が歴史的にも、民俗学的にも、わたしたちの〝まち〟の姿を知り得る貴重な文化遺産であり、文化財であります。この文化財を後世に伝えていくことは、私達の大切な役割ではないでしょうか。

このことから石巻市教育委員会では、失われてゆく町名を後世に伝えようと、昭和五十六年度から「旧町名表示石柱設置事業」を実施しており、今年度も2ケ所に設置いたしました。この事業は、地権者の方々のご好意とご協力によって実施されております。今後も、皆さんのご協力をお願いいたします。

≪昭和56年度設置≫

『新田町』＝千石町（石巻グランドホテル前）
『渡波本町』＝渡波町三（内海笑方前）
『湊本町』＝湊町一（湊幼稚園前）

≪昭和57年度設置≫

『横町』＝千石町（河北新報社前）
『中町』＝中央二（丸光石巻店前）
『九軒町』＝門脇町二（消防第三分団前）

≪昭和58年度設置≫

『立町』＝立町一（振興相互銀行前）
『面剣田』＝清水町一（ニイヌマビル前）
『八ツ沢』＝泉町一（八ツ沢緑地公園内）

≪昭和60年度設置≫

『後町』＝門脇町二（西光寺前）
『袋谷地』＝水明南二（長林寺前）

≪昭和61年度設置≫

『本町』＝中央一（旧石巻郵便局前）
『坂下町』＝中央一（永巌寺参道入口）

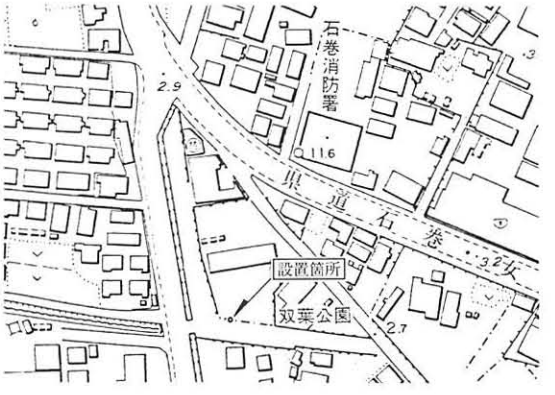
≪昭和62年度設置≫

本草園　双葉町（双葉町公園内）

下野（栃木県）の郷士井上吉兵衛は江戸後期に石巻へ移住。廻船業で産をなし、嘉永五年（一八五二）朝鮮人参の栽培に成功。全収穫を献納し続けて藩財政に寄与した。安政元年（一八五四）以降は、日和山、牧山ほか各所に松、杉、檜、漆など約十六万本を植えて献納。文久二年（一八六二）人工接木による長十郎梨を開発、普及させるなどの功績を残した。「本草園（本草は薬用動植鉱物の総称）」は、彼が朝鮮人参を栽培した畑をさす地名である。

御所入　湊字御所入（御所入公園内）

延元三年（一三三八）九月、義良親王（のちの後村上天皇）と北畠親房ら一行は伊勢（三重県）から奥州牡鹿湊（石巻市湊）への船旅の途中、暴風に遭って親王は伊勢へ戻り、親房は常陸（茨城県）に上陸した。事前に連絡を受けた石巻城主葛西清貞は親王の仮萬に備えて施設を造営。それにちなむ地名が「御所入」「御所裏」と伝えられている。御所については、葛西氏代々の居館の呼称とする説、護良親王の流寓先とする湊地区の伝承も聞かれる。



文化財標柱設置事業

〝文化財ってどこにあるの？〟
文化財標柱を設置しました！

石巻市内には沢山の文化財があります。ところが、その多くは普通の畑だったり民家であったり、と目立たないところにあります。石巻市教育委員会では、このような遺跡をはじめとする文化財の主な場所を選定し、市民の皆さんにわかりやすいように、毎年文化財標柱を設置しています。今年度は次の五本（建て替えを含む）を設置しました。

何かの折に皆さんの目に触れましたなら、立ち止まって見て下さい。そして、文化財の大切さを理解していただき、その保護・保存のためにご協力下さいますようにお願いいたします。

《昭和62年度設置》

平形館跡

標高百八〇㍍の山頂に築かれた中世の城館。規模は小さいが、平場、空堀、土塁が形よく配置された山城の典型的な例である。殆んど昔のまま保存されている数少ない館跡の一つである。館主は不明だが、安倍貞任の居館であったと言い伝えられている。

▼設置場所＝沢田字平形日影山

水沼古館跡

頂部には本丸と思われる平場と、その下に二の丸、段築が築かれており、空堀跡と思われる堀切がある。館主は不明であるが、地元の豪族水沼上野が築いたものと言い伝えられている。

▼設置場所＝水沼字日影

◀水沼古館跡

▼平形館跡

大和田館跡

館主不明。古文書等にはいっさい記録のない館跡である。しかし、頂部には不明瞭ながら二段に整地された平場と、北・東側の杉林中には数段の段築が築かれている。

▼設置場所＝根岸字坂上山

南境館跡

規模は小さいが、よくまとまった単郭式の中世城跡。頂部の本丸とそれをとりまく腰郭、館の南端を画する土塁と空堀がよく残っている。館主は葛西家臣大瓜玄蕃と伝えられているが、確証はない。

▼設置場所＝南境字館下

真野萱原伝説地

「露わけむ秋の朝気は遠からで
　　都は幾日まのの萱原」

という藤原定家の歌で知られるように古来より歌枕として名高い、この片葉の葦（アシ）は、京の都を思いその方向にばかり葉をつけると言い伝えられている。

▼設置場所＝真野字萱原（長谷寺前）

石巻市文化財だより（第17号）

昭和63年3月30日 印刷
昭和63年3月30日 発行

発行：石巻市教育委員会
石巻市日和が丘一丁目1番1号
電話（0225）95－1111 内線343

印刷：株式会社 鈴木印刷所
石巻市蛇田新谷地前121
電話（0225）22－4101